序章

思考の出発点

困難な時代

私たちはいま、先行きを見通しにくいとても困難な時代を生きています。今日の世界は、言ってしまえば、ある一つのシステムが壊れつつある世界です。人々の拠りどころとなってきた思想などの大きな枠組みは崩壊し、中間層はバラバラになっています。流動化が加速する現代社会のなかでは変化しつつある要素があまりに多くなり、それらの変数を適切に分析して将来を予見することが、ますます困難になっているのです。

そして、ここ数十年の間に世界中に吹き荒れたネオリベラリズム――それは経済学的な現象である以前にイデオロギー的・文化的な現象です――が、社会科学と歴史的考察をすっかり荒廃させてしまいました。といっても、市場の論理というのは連帯感に反するもの

ではなく、そうしたものにそもそも無関心なだけなのですが。

歴史的にみると、起業の自由や資本主義というのは、宗教あるいは家族から発生する社会的な道徳を基盤としていなければ機能しないものでした。たとえばイタリアのメディチ銀行はすばらしい一族の連帯によって成立していました。要するに、資本主義は経済圏の外側に位置する集団の道徳基盤をなくしては考えられないコンセプトだということです。家族あるいは宗教に根ざす道徳心がなければ、資本主義は効力をなくし、腐敗していくのです。

世の中を見渡してみてください。国の重職や銀行に所属し、みずからが資本主義を実践していると思っている人々は国を貧困化させ、一般市民に緊縮財政を押し付けています。特にフランスでは、緊縮財政という掛け声のもとで、マスクの大量廃棄〔二〇一九年までにフランス政府が使用期限の切れた備蓄用マスクを大量廃棄し、そのなかには使用可能なものも含まれていたのではないかとされる問題。二〇一七年には七億一四〇〇万枚あったマスクの備蓄が、二〇二〇年三月時点で一億一七〇〇万枚に削減されていたとされる〕が実施され、その後コロナが社会を襲い、人々の健康が危険にさらされてしまいました。

こうして道徳と宗教の崩壊は、国家による過失致死という事態をも引き起こしたのです。そしてマクロンのような高度な教育を受けたはずのエリートは、将来を予測するどころか、

現代世界の問題にまともに対処することもできず、そもそも現実に何が起きているのかということすら十分に理解できていないように見えます。国の支配層やエリートと呼ばれる人々も混迷しているのです。これこそ、ネオリベラリズムがもたらした荒廃なのです。

これから詳しくお話をしたいと思いますが、私は自分の所属している社会から少しばかり逃れることで、自分の社会や世界、歴史について最低限の客観的な視点と明晰さを持って眺めることが可能になると考えています。社会においてマージナルな存在、アウトサイダーになるというのは、ある程度は大切です。しかしながら、アウトサイダーになるためには一つの前提条件があります。それが、じつは集団的な構造の存在なのです。枠組みがあり、組織化され、ある考え方を持った社会がそこに存在していることが前提なのです。まったく何もない、無の状態に対して、人はアウトサイダーにはなれないのです。

思考を可能にする土台

私は研究者としてユニークな視点から物事を分析すると言われます。しかし、私の思考もそうした大きな枠組みのなか、そして歴史のシークエンスのなかに組み込まれている一部なのです。これが思考というものが成り立つうえでの条件です。

私の研究も同様です。それは歴史研究の長いシークエンスに組み込まれたものなのです。

私の研究は、アナール学派〔多様な歴史的資料を駆使し、過去の生活を総体的に描出することをめざした歴史学の一潮流。二〇世紀フランス歴史学の主流をなす〕から始まり、ケンブリッジの歴史人類学に学び、それはさらにピーター・ラスレット〔一九一五―二〇〇一年。イギリスの歴史人口学者〕が発見した核家族から、アラン・マクファーレン〔一九四一年―。イギリスの歴史学者・人類学者〕がそれを個人主義と結びつけた流れに連なるものです。研究者としての活動というのは、たくさんの個人が関わってきた研究シークエンスの一部を成すものなのです。

もちろん、ある個人が解を見いだしたり、あるいはそこにたどり着く道を発見したりすることはあります。ですが、基本的には個人がもたらすものは問いなのです。以前の研究者が出した問いに答える、そして、それに反論したり、あるいはそれを受けて別の問いを提出する――こうしてみると、研究というのは問いと答えの連鎖なのです。研究という観点から見たとき、思考というのは、こうした歴史的な連なりと蓄積のうえに成り立っているわけです。

今日、世界について思考をするのは本当に困難なことです。一方では、世界が流動化していくなかで、考慮しなければいけない変数はますます増え、他方で思考の土台である集団的な枠組みや歴史的連累が、ネオリベラリズムによってどんどん掘り崩されてしまっているわけですから。逆に言えば、そうであるからこそ、思考とはどういう営みなのか、人

間にとって思考とは何なのかといったことについて、改めて検討すべきときなのだとも言えるでしょう。

なぜ哲学は役に立たないか

では、「思考する」とはいったいどういうことでしょうか。こうした問いは、とても漠然とした抽象的なもので、いかにも答えようのないものに見えます。ある意味ではきわめて「哲学的」な問いかけとも言えるでしょう。

だから、ひょっとしたら「思考する」ことのプロは哲学者だろう、と早合点してしまう人もいるかもしれません。実際、哲学の歴史を振り返ったとき、名だたる哲学者たちが「知性をどう改善するか」「よりよく思考するためにはどうすればいいのか」といったことに思いを巡らせてきました。ちょうど「思考とは自分自身との内的な対話である」というプラトンの言葉どおり、哲学者たちは多かれ少なかれ、机に向き合い、「考えるとはどういうことか」と自問自答を繰り返してきたわけです。

しかし私は、このような態度とはまったくかけ離れたところで思考してきた人間です。そもそも私にとって「思考する」とは、そんな抽象的なことではないのです。私は、思考のメカニズムをある意味で自然発生的なものとして捉えてきました。私は自分の頭から真

実が生まれるなどとは思っていません。これは哲学的な思考態度とは異なるものです。のちに詳しく説明しますが、私は本能的に、そして育った家族の伝統からも、フランスの哲学には最初から疑問を持ち、否定的な立場でした。高校の哲学の授業でさえ、拒否することからスタートしているのです。

世界の名だたる哲学者たち、デカルト、カントなどは、私にとっては言葉遊びをしているだけなのです。なぜそんなに批判的かというと、哲学が現実から完全に離脱してしまっていると考えるからです。私が読んだ哲学書に、アルフレッド・エイヤーの『言語・真理・論理』というものがあります。エイヤーは二〇世紀のイギリスを代表する哲学者・論理学者の一人ですが、そこにはデカルトやカントの哲学というのは文法の間違いである、というような主張がありました。私はどちらかというとこういう考え方に近いわけです。

私の愛読書の一つはバートランド・ラッセルの『西洋哲学史』です。そこでは、大陸の哲学は軽く批判的に描かれているのです。私はイギリスの経験主義を基盤としますが、その経験主義ですら、直感的な一般常識を優雅にまとめただけのものだと考えているのです。私は思考するために哲学を学ぶ必要はありませんでした。経済を考えるために経済学者はいらないというのと同様です。西洋の経済の問題は経済学者が出たことで始まったとすら、私は思っているのです。

ですから、私にとって「思考する」とはプラトンが考えていたようなことではありません。そもそも、私は哲学者などではありませんし、正直に言ってしまうと「思考とは何か」という問いほど、私にとって厄介なものはないのです。

混沌から法則を見いだす

私自身の話を続けましょう。私は子どものころからずっと、歴史家になりたい、と考えてきました。それはもう一〇歳のころから揺るぎないもので、情熱を持って、特に目的も持たずにひたすら歴史書を読み漁っていました。古代ギリシャの歴史から古代ローマ、エジプト学など、とにかく過去にさかのぼることに傾倒していたのです。

そのころ、私は『イリアス』と『オデュッセイア』を読みました。そして、ギリシャの英雄たちのなかでも特に面白いと思ったのはオデュッセウスです。彼こそ知性にあふれ、才知に長けた人物です。このように、私のなかで知性というのは非常に重要な価値でした。私が知性について最初に考えたのは、暴力に対抗するものとしてそれが立ち現れてきたときでしょう。オデュッセウスとアキレスの対比がまさしくそれです。アキレスというのはヒステリックな愚か者に見えました。また、ヒュブリス（ギリシャ語の「傲慢」）という言葉はいまだに私を悩ませ、ゾッとさせるのです。

当時の私にとって、考える、思考するという行為は、暴力の反対にあるものでした。ただこれは幼いころに感じていたことであり、歴史の現実は必ずしもそうではないのですが。私には昔から喧嘩っ早いところもありました。でも喧嘩をするならば頭を使ってしようと思っていたのも事実なんです。とにかく、このように歴史に情熱を見いだしていた私は、その後、中学校に入ってから医学に、高校に入ってからは物理学にも興味を持ち始めます。歴史に関しては自発的に興味を持ち始めましたし、結局学術研究ということに関しても同様のことが言えます。

私はこれらのことをほぼ本能的な欲動だと感じてきました。思考したい、考えたい、というような欲望を抱いたわけではないのです。だから思考とは何かということについて思い悩むこともありませんでしたし、まず何より重要だったのは、歴史などの本をひたすら読むことだったのです。それから、だんだんと学術研究と歴史の法則を見つけることへの関心が加わっていきました。

私が研究者人生で何をしてきたか。先に述べたように、それは他の研究者たちがしてきたことの延長線上にあるわけですが、混沌とした歴史のなかに法則を見いだすということでした。私が最初に見つけた法則は、家族構造の種類と政治思想の関係性です。また、時間の流れのなかで家族システムが複雑化していく法則は、私の研究の柱となりました。し

かしながらこれは自然な流れで行ってきたことで、方法論について考えるということはなかったのです。

思考とは手仕事

この前、娘の学校のミーティングに参加したのですが、そのときに哲学の先生が言っていたことに私はとても感心し、共感しました。彼女は、なぜ手書きを推奨するかということを説明していました。現代社会では誰もがコンピュータでタイピングします。コンピュータで書いたことというのは、切り貼りが何度でも簡単にできてしまいます。しかし、手書きの場合は、書き始める前に考えなければいけません。だから、思考は手仕事なのだと彼女は言うのです。本当にその通りだと思います。

以前、『新ヨーロッパ大全』（一九九〇年）のプロジェクトを始めたときのことです。これは、『第三惑星』（一九八三年）と『世界の幼少期』（一九八四年）という以前の著作に寄せられた批判に応答するものでした。批判してきた人々にきちんと自分の説を証明してやろうと思った私は、ヨーロッパの歴史を一六世紀までさかのぼり、宗教の危機や読み書き、産業化、人口推移、思想の台頭などをすべて家族構造の地図をもとに再考しました。

それは途方もない作業で、三八三もの地理学的な分析単位を用い、書き上げるのに七年

も費やすことになりました。この本を執筆していた時代には自動で製図できる手段がなかったので、カッターを使って地道に作成しましたが、もともと不器用なこともあり、長時間を地図製作に費やしました。この本に収録されている大切な地図の大半は、私が製作したものがもとになっています。

『新ヨーロッパ大全』の執筆は、苦行のように自分に規律を課し、自分の殻に閉じこもりつつ同時に強い意志を持って進めた、まさに自分を試すようなプロセスでしたが、これを経て私自身が変化したと言えるほど、とにかく誇りが持てる本に仕上がったのです。

考えるのではなく、学ぶ

このように私にとって、考える、思考するというのは、座って「よし、考えよう、アイディアが湧くのを待とう」ということではありません。言語とは何かとか、思考とは何かといったことを、椅子に座ってさあ考えようという哲学的な態度とは別のものだと思うのです。

私はそもそも学ぶことが大好きです。ですから、膨大な知識を蓄積する人間です。人々が私についてあまり知らないことは、私がこれまでどれだけ膨大な量の資料を読み込んできたかという点かもしれません。私は専門研究に限らず幅広い文献を読んできました。つ

まり私は考え込まないのです。

考えるのではなく、学ぶのです。最初に学ぶ。そして読む。歴史学、人類学などの文献をひたすら読み、そして何かを学んだとき、知らないことを知ったときの感動こそが思考するということでもあります。

私は子どものころからこうした情熱をもち、歴史書を読み漁ってきたわけです。その後、高校二年生から三年生にかけて、当時は共産主義者だった私はマルクス主義の本、それからスターリンやギリシャのレジスタンス運動、戦艦ポチョムキンの反乱についての本などを読みました。それから大学に入学し、一年生と二年生で統計学の手ほどきを受け、三年生で歴史人口学を学んだのです。

このように私はずっと本を読み、そしてひたすら学び続けてきたのです。いま私は第一次世界大戦の起源について色々と読み進めているところです。そして非常にいろんなことを学んでいるのです。そこに知的な目的というものは特にありません。そこにあるのは、ただただ学ぶことの喜びなのです。私にはこの学ぶ喜び、それに対する情熱があり、それこそが私の人生の本質といってもいいかと思います。これは考えてみればどちらかというと謙虚な態度です。他人がしてきた研究の結果をひたすら読むという受動的な行為なのですから。

能力はだれもが平等

それでは、私にとって知性とは何でしょうか。人間はだれでもある程度の能力を持っていると私は思います。そして知性の違い、脳にあるものの違い、良い生徒、悪い生徒、というのは、（家庭環境などを除けば）本当に少しだけの違いから生まれると思っています。だれでも話す能力を有していますし、ある程度の計算もできます。能力的には、九九・九九%だれでも同じなのです。アダム・スミスがいいことを言っています。彼は『国富論』のなかで、哲学者と凡人の間にはほんのわずかな違いしかなく、すべては知的労働の分業によると言っているのです。

ネオリベラリズムの象徴のようになってしまったアダム・スミスなのでこのような考えを持っていたことはあまり知られていませんが、そもそも彼は人が本質的に平等であることを信じた人物でした。アダム・スミスにとって哲学者と普通の人々との違いとは、知性の違いではなく、知的活動における単なる役割の違いに過ぎないということです。では、この知的な活動というのは、どういう性格のものでしょうか。

知的活動といっても、思弁的なものから実践的なものまでさまざまなレベルがあります。思弁的な知的活動というのは概念的なもので、物質的なレベルには結びつかず、思考だけ

を切り離すことができるように見えるものです。職人の技巧やさまざまなしぐさのなかにも知性というのは存在するはずなのですが（これが実践的な知的活動です）、そうした知性は、このような概念的な知的活動のなかでは軽視される傾向にあります。物理的なものや手作業のもの、実践への適用、身体の動きなどから切り離された思考こそ、観念的に高尚なレベルにあると認識されていたりするのです。

この定義からすると、その先端を行く分野が数学だと思います。なぜならば数学こそ物体の動きに左右される現実からほど遠い世界まで行くことができるからです。数学こそ、ある原則を設定しさえすれば、あとは脳のなかだけで次々と思考を続けることが可能な分野なのです。ちなみに、私は数学と物理学を完全に分けて考えます。物理学は世界を反映し、現実に枠組みを与える分野です。ところが数学というのは現実世界とは関わり合うことなく進めることが可能なのです。

哲学はどうでしょうか。確かに、思弁的な知的活動の一方には形式論理学の数学があり、もう一方には人文科学があります。ただし、――先ほども述べたとおり、これは大戦後のイギリスで哲学を学んだ父親からの影響が大きいのですが――戦後、哲学というのは「哲学批判」に集約されるようになってしまいました。哲学というのは科学の発展と同時に廃れてしまったと私は理解しているのです。そういうこともあり、私の思考法について考え

るときには、哲学者に由来を見いだすことはまったくもってできないのです。

思考のフレーム

さて、知性の話に戻りましょう。私は知性というのはほとんど平等に存在するものだと考えていますし、考えるという能力はだれにでも備わっているものだと思っています。思考そのものはとっさの行為、自然発生的な行為です。しかしもちろん、これを思考法として「学ぶ」ことも「磨く」こともできます。

私の場合は、思考にフレーム（枠組み）を与えてくれたのが統計学でした。のちほど詳述しますが、私にとって考えるというのはデータを蓄積するということで、データの関連性を見つけることや地図を比較することは、ほとんど自然発生的にできることです。しかし、その後に統計学がフレームとしての役割を果たすのです。言い換えましょう。自然発生的なとっさの思考というのは、いわば「思いつき」あるいは「気づき」のようなもので、それ自体を方法論として体系化することは困難です。ですが、そこで生まれたものは何らかの手段で検証しなければなりません。こうした着想の検証やデータ分析の際に――私の場合は統計学という――フレームが重要な役割を果たすのです。

このフレームを学ぶことで、知的な事柄も分業することが可能になります。たとえば技

術の習得や行政の規約策定やら歴史学的考察といった知的な作業をすることができ、これらの領域で専門性をもつことが可能になるのです。

そして、私は知性には大まかに三つの種類があると思っています。まずは処理能力のような頭の回転の速さ、次に記憶力、そして創造的知性です。

処理能力としての知性

私はマクロン大統領やエリート官僚養成校であるＥＮＡ（フランス国立行政学院）出身の人物や社会の上層部にいる人間を批判しますが、彼らも一種の知性を持っている人間です。これは基本的な能力というのに近い知性のことで、要はどれだけ頭が速く回転するかということなのです。たとえばＩＱテストなどで測定できるもののことです。計算的な「処理能力」といってもいいでしょう。

頭の回転が速い人、計算が速い人というのはいます。私は自分のＩＱを測ったことはありませんが、決して高くないでしょうし、間違いなく私の親友のほうが私よりも高いでしょう。これは要するに処理能力に基づく頭の良さなのです。

社会は非常に複雑です。だからそこで起きることを理解するためにはある程度の処理能力が必要です。それによって、いろんな出来事を把握して多くの事実を頭に入れつつ、す

ばやく思考することができます。現代社会においては、頭のなかに分類されている引き出しをすばやく開ける能力が求められるのです。この意味で頭が良いと言われる人々は、エリート階級で言えばたとえばローラン・ファビウス〔一九四六年―。フランスの政治家〕やアラン・ジュペ〔一九四五年―。フランスの政治家。元首相〕といった人々でしょう。彼らはフランスのいわゆるエリートコースをたどった人物たちで、高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）を経て、最終的にはＥＮＡを卒業しています。

ちなみにフランスのエリートコースでは、高校卒業後、グランゼコールと呼ばれるエリート養成大学の選抜試験を準備するための準備級（プレパ）に進学します。そこで二年ほど学び、それから高等師範学校などのグランゼコールに進みます。そしてＥＮＡの選抜試験はさらにこの後に受ける人が多いのです。ただし、マクロン大統領は、パリ政治学院出身で、いわゆる超エリートが出る高等師範学校出身者ではありません。その後、彼はＥＮＡに進みますが、その時代から目立ち始めたのは準備級のころのネットワークがあったからこそなのです。

記憶力という知性

そして、もう一つの知性が記憶力です。学生のころに、あるマルクス主義の歴史学の教

授が言っていたのですが、少なくとも歴史学においては、記憶力というのも一つの知性なのです。

歴史学者になるために記憶力というのは欠かせません。私は頭の回転の速さはもっていませんが記憶力には自信があります。幼いころは映像記憶の能力を持っていたくらいですから。中学生のころ、親にちゃんと勉強をしたのかと聞かれて、急いで教科書を丸暗記したという思い出もあります。私はこのように視覚から入る記憶力に長けているのだと思います。そういうわけで、大学時代には大教室での授業はほぼ行っていませんでした。話を聞いて覚えるのは苦手だったので、それなら本を一人で読んでいたほうがよかったわけです。

さきほど、概念的な知的活動の最たるものが数学だと言いました。数学というのは、最小限のツールを使って、人間の精神の奥深くまで追究できる分野なのですが、それに対して、歴史科学は知的な作業方法としては真逆にあります。私が扱う歴史は統合的なもので、歴史のなかに一般的な法則や規則正しさを見いだす研究です。そのような分野においては、ちょっとしたアイディアや少しでも意味のある事柄を見いだすまでに、信じられないほどの量の事実（ファクト）やデータをかき集める必要があります。そういう意味でも記憶力は大切なのです。

創造的知性

最後に、創造的な知性というのがあります。創造的知性とは、すでに手元にあるデータを説明する、あるいはかたちづくるために脳にあるさまざまな要素を自由に組み合わせ、関連づけることができる知性を指します。気をつけていただきたいのですが、創造というのは「無」から何かを生み出すことではないのです。

最初に挙げた処理能力とこの創造性という二つの知性は、先に挙げた数学という分野においても現れます。これはケンブリッジの友人が話してくれたことですが、数学に関して、たとえば高校卒業試験のレベルや大学レベルでも、非常に頭の切れる人たちというのはいます。ところが研究の領域になり、新しいアイディアを生み出すということになると途端に何も出てこなくなってしまう人たちがいるのです。知性の本当の謎というのは、どうやって斬新なアイディアを思いつくか、という点にあるのです。

人はどうやって提案や解釈、新たな視点、あるいは誰も考えつかなかった表現方法などを思いつくのか。非常に能力の高い人たち、頭の回転が速く記憶力も抜群な人たちの頭というのは、勝手に動く機械のようになっていて、読書をこなして記憶し、すべて求められたフォーマット通りに吐き出すという一連の作業を楽々とこなせます。

フランスの教育では基本的に、重要な論点を型通りにまとめてみせるという特殊な方法を習得することが求められます。イギリスなどのエッセイ文化とは違うのです。しかしこれはあくまでテクニックなので、特に新しいアイディアを生み出さなくてもできてしまいます。つまり、思考がなくてもできることなのです。これはもはや人間でなくても、コンピュータでもできてしまう作業でしょう。

半分冗談ですが、私はジュペ、ファビウス、マクロンなどのロボットはもう少しすれば作れるようになってしまうのではないかと思うくらいです。日本の技術力があればできそうですね。ＥＮＡを卒業したフランスの政治家たちのモデルを研究してロボットをぜひ作ってみてほしいものです。

機能不全に注目する

私はこれまで、自分自身の知性のあり方や思考法についてはあまり自覚的に考えてきませんでしたし、いまでも明確な方法論があるとは思っていません。これから詳しく述べていきますが、私にとってそのプロセスというのは、完全に無意識で運しだいでもあり、言うなればシステムの機能障害のような状況と密接に結びついているのです。「アルゴリズム思考」なる言葉がありますが、これほど私の思考法と相容れないものはありません。つ

まり、私にとって思考のプロセスとは、たとえばコンピュータの処理などとは真逆のプロセスなのです。

もちろん、先に述べたとおり、ある程度の処理能力は社会を理解するために必要です。ですが、社会を理解することは、必ずしも社会について考えることを意味するわけではないのです。社会を考えるためには、機能不全や一見関係のないもののつながりに気づくことが何よりも大切です。聴力に長けている人は音で関連性を見いだすこともできるでしょうし、私のように視覚から入る人間は、イメージとイメージをつなげていくことで関連性を見いだします。私が研究の際にしばしば地図製作などを用いるのも、じつはそれにつながっています。さまざまな事柄を関連づけるとともに、通常の状況から外れたものに関心をもつこと、それが思考の出発点だと言えるのではないでしょうか。